

## 第一八分科会

### 「地域と学校の文化・スポーツ活動」

子どもをまるごととらえるアンテナを張る

共同研究者

櫻井 幹二

## 一 概括

今年度の分科会報告は、当日参加を含め四本。昨年の本三本かわずかながら増加した。内訳は、学校（特別支援学校）における文化活動に関するものが一本、地域における文化活動に関するものが一本、小学校の「校歌」の変遷をたどったものが一本、そして学校図書館活動に関するものが一本であった。

参加者は二日間で述べ二五名ほど。（司会者・共同研究者・運営委員を含む）昨年同様学生の参加者が多かったが、その学生からのレポートが二本あったことは特筆すべきことである。

報告が四本ということもあり、分科会の議論に十分なゆとりが生まれた。今年度の議論の特徴は、学校や地域における文化活動を発展させていく上で、将来の担い手である子どもたちの参加をどう確保し、その視点をどう生かすかとともに、子どもたちの主体性をどう保証していくかという点に多くの時間がさかれたことである。

一方、今年度はスポーツ活動に関する報告がゼロとなり、この面での課題を残すこととなった。

## 二 各報告の内容及び議論

報告①「現代における学校図書館の選書と『教育的配慮』についての考察」（道教育大札幌校・星美由紀）

学生参加者の報告の一つ。学校図書館での「選書」が本当に子どもたちの意志・要求に沿っているのかという疑問から出発し、「図書館の自由」と「教育的配慮」双方の考察を加えながら、子どもたちが自分にとっての適書、良書を主体的に選択できる能力をいかに育成していくかを探求したレポートである。

討論では、学校図書館での選書過程に子どもたちの意志・要求を反映させていくことの重要性についてはほぼ共通認識された。しかし、公共図書館と学校図書館との違い、発達段階に応じた自主性の保証、小・中・高それぞれの学校図書館の役割の違いとそれぞれの選書の現状、子どもたちの要求の分析など今少し具体的な現状把握と多面的な考察が必要ではないかとの意見も出された。

同時に、選書の主体としての子どもたち自身の主体性、自由の喪失という視点からこの課題を考察することによって、新たに見えてくるものもあるのではないかと指摘もあった。

とはいえ、学校図書館活動への新たな視点からの考察の可能性を秘めたレポートであり、さらに継続した追求が期待された。

報告② 「文化的活動の可能性」(新篠津高等養護・山田勇氣)

報告者の前任校である美深高等養護での、学校祭における演劇発表の取り組みを通じ、子どもたちと教職員集団の成長の可能性を考察したレポートである。

知的障害を持つ子どもたちが、主体性を保持しながら演劇による自己表現を全うしていくことは容易ではない。演目の選定、脚本執筆、配役、演技指導、日々の練習、舞台発表に至るこうした困難な過程を、教職員集団の協同を軸にしながら、子どもたちへの丁寧なかかわりによって克服し、子どもたちの確かな成長を実感した感動とそれを共有した教職員集団の成長が生き生きと語られた。

討論では、オーディションから始まる取り組みの中で、子どもたちの主体性をいかに確保していくかの質疑に、多くの時間がさかれた。同時にロールプレイとしての演劇の持つ教育的効果や、部活動とは違う特別教育活動の一環として教育課程上はどう位置づけていくべきかということも議論された。

とりわけ学生参加者から、自身の経験として、学校行事における文化的活動への参加は「やらされている感」が強かったとの発言が多くあり、子どもたちが主体的に取り組んでいくため

の手立てを教職員集団が丁寧に作ることの重要性が再確認された。

### 報告③ 「函館野外劇誕生の顛末」（荒井到）

講談師・荒到夢形として函館で活躍する報告者が、二七回目を迎える「函館野外劇」誕生の顛末を、生みの親である「クロード神父伝」の第四話として創作した講談を紹介したレポートである。

函館の野外劇は会場となっている五稜郭公園の管理の問題もあって今転機を迎えている。あらためてその誕生の歴史を振り返り、この行事の持っている意義を再考してみようと言う意図のもとに創作されたものである。函館野外劇のモデルとなったクロード神父の故郷フランス・バンデール県・ルビデイフの野外劇の視察から始まる函館野外劇誕生の経過から見えてくるのは、「贅沢な遊びと言えはそれまでですが、野外劇は一つの文化です。文化というのは人間が人間らしく生きる証でもあるのです。」というクロード神父の言葉を、今、地域でかかわるすべての人々が、どうとらえ直し、新たな方向性を模索していくのにかに尽きる。

討論では、函館野外劇の現状と市民の意識についての質問が多く出た。さまざまな地域で「活性化」の名のもと、多くの文化的行事が取り組まれているが、「イベント」「風物誌」とい

うとらえではなく、将来の主體的な文化の担い手として、子どもたちをどう育てていくか、そのために学校でも「アンテナを張る」必要があるのではないか、ということが確認された。

報告④「戦前と戦後の校歌のあり方」（札幌大谷大学・大山楓）

二年連続して合研に参加した報告者が、前年度の議論を踏まえ、戦前と戦後の教育のありようの変化を「校歌」という側面から追求した当日参加のレポートである。

「校歌」の発足、戦後の「校歌」のあり方などを歴史的にたどる一方、具体的にどう変化したかを札幌山鼻小学校、幌南小学校両校の校歌を例に示した。天皇賛美、国家への奉仕（「すめらぎ」「大君」「大和心」「み國」など）の言葉が戦後では一様に消えているというのは容易に想起されることであるが、実際に例示されるとそれなりに説得力を持つ。

討論では、前年度の議論を受け止め、レポートにまとめた努力を分科会の成果として喜ぶ一方、課題として、それらの校歌の変化の過程における、地域、保護者、子どもたちのかかわりと意識がどうであったかということへの具体的な追求が不足していたことは否めない点が指摘された。

教育の歴史をたどる視点としては貴重なものであり、今後さらに多面的に追求されることが期待された。

### 三 ままとめと課題

今年度の本分科会のまとめとして議論された点は以下の通りである。

1 教職員の多忙化が進行する中、学校独自の文化的取り組みを進め、かつ、子どもたちの主体性をどう保証していくか、その案配が大きな課題となっている。

2 子どもをまるごととらえるアンテナを大きく伸ばすということが重要になっている。

3 文化的行事を継続する楽しさを保証する組織をいかに構築していくかが、学校や地域にとってきわめて重要である。

4 市場原理や成果主義が跋扈する状況の中で、過程として見ていく、はぐくんできていくという視点が見直されるべきである。

また、今後の課題としては、以下の通りである。

1 レポート参加を増やす、とりわけスポーツ活動に関する実践報告が出ることは引き続きの課題である。

2 共同研究者の発掘、学生参加者を含めた参加者増の努力は引き続き必要である。

3 分科会のテーマの範疇、議論の範囲と焦点化という継続した課題はなお考え続けていく必要がある。

(文責・櫻井)